

パネルディスカッション

コーディネーター 三島次郎（かわさき自然調査団団長）

三島）質疑応答の時間を取っていなかったなので、質問を受け付けることにした。

質問）生物多様性の危機に関連して、鹿が入った時はどう考えるか

岸）鹿の個体数は増えている。原因は、山の管理の不足とか、温暖化も影響しているとか、複合的な要因によると思う。



質問）ホタルの西日本型、東日本型という話があったが、温暖化によって西日本型の分布が広がるということがあるのか

大場）発光パターンについては遺伝子が関連することなので、温暖化とは別の次元のこと。

但し、西日本型のゲンジボタルが各地に放流され繁殖しているが、温暖化に伴い西日本型のゲンジボタルが棲みやすい環境になってきているというのは事実だと思う。その餌になるカワニナの繁殖も冷たい水よりも少し暖かい水のほうが繁殖しやすいといったことの影響が出始めているかなと感じているので、今後ゲンジボタルの繁殖状況を見守りたい。

質問）このままいくと、2050年には地面の温度が4~5℃上がると聞いたが、その時に東日本のホタルが消えることになるのか。

大場）南西諸島、沖縄には島嶼ごとに固有の種が生息している。しかし沖縄島に生息するオキナワスジボタルなどは、本来生息していない鹿児島県のトカラ列島に人為的に移入された結果、より北方地域に分布を広げたりしている。こうしたことは今後、外来種のホタルも含めて十分考えられる。

質問）川崎で水生ボタルを保護している団体だが、今年減ってしまった。周囲が住宅に囲まれている。人工照明の影響は大きいのか。

大場）光は非常に大きな要因。それについては、室内、野外の実験をして、より適切な光源を見つけている。ホタルは光でコミュニケーションをとっている。特に、ハイケボタルは、ゲンジボタル以上に影響が大きいので見守っていく必要がある。特に曇天の夜空の反射光は影響が大きい。

質問）照明の変化はないが、今年は減少した。このような影響の出方もあるのか。

大場）現場を見ていないので光の影響がどうなっているのかはわからない。光だけではなくて、様々な要因があるだろうから、それらを紐解いていく必要がある。

三島）里山というのは自然と人間とが長い間付き合ってきた場所。

里山は自然ではない。不自然。人間の力が加わらないと自然に戻る場所。

里山の保全ということに対してどの程度、人が関わっていったらいいのか。

使わなくなったら自然に返してあげよう。

放っておけば雑木林になる。更に遷移が進めば森になる。

岸) 里山というのは人との関わりが欠かせない。生物多様性の保全の観点からすると手を付けない場所もあつた方がいいと思う。遷移に任せて変わっていく場所も必要。でも、それだけだと多様性は低下する。いい意味で攪乱を与えることで高い多様性を保てた。大事なのは頃合いだと思ふ。過管理になっては駄目なので、程よい管理を継続することで地域の生物多様性を保っていきける。

大場) そもそも、生物多様性とは何かということに戻して考える必要がある。

私は、人間あつての里山だと思ふ。そこに入った時に心和やかになるとか、驚きとか、発見とか、楽しみとか、それがベースになると思ふ。今までは生活の知恵、或は生活パターンが当てはまって、歴史的に文化遺産も含めて育まれてきた。ここにきて私たちの生活パターンが変わってしまったわけで、そうするとつくらなくてはいけないとか、残さなければいけないという話になる。どの程度残さなければならぬかという私の観点からいうと教育、文化財、楽しみ、発見、感動、子どもたちへの継承が基になるような観点で目標を定めてゆくのがよいのではと考える。元に戻る範囲であれば、何が何でもこうしなければいけないというものではない。都市周辺の里地里山は非常に重要である。それは他への影響が大きいからである。ここではこうするという固有の方法を活動の中で提示していくことが、これからは求められる。それぞれの固有性が重要で画一的に行うのは良くない。横須賀市博物館には附属施設である自然教育園がある。公園と教育園はどう違うのか。決まった答えはない。子供たちに身近な自然の宝をどう伝えていくのかということが重要な活動目標と考えている。

佐久間) 子供たちにどう伝えていくかということだが、ここ 5 年ほど 20 歳前後の大学生と接する機会を持つようになって、世代が違ふと感覚も違ふのだと感ずるようになった。映画の「となりのトトロ」を見たとしても、私と同じ感覚で見ているとは思えない。そういう人たちに、「これが大切だ」「里山は気持ちいい」ということをどう伝えたらいいのか。里山の自然学校の活動は貴重だと思ふが、里山管理の楽しさや意義を若い世代に「いいものだ」と、頭のなかだけではなくて体で理解してもらうことが難しいなと思つている最中だ。80 年代は、私は 20 代だったが、あの頃、雑誌の「ビーパル」ができて、アウトドアという言葉で自然との付き合い方がファッションのようになって、皆が山へ行った。そのあと「里山」という言葉が出てきて、私が子供のころ過ごした野山のイメージが意義あるものと言われるようになった。それが 90 年代のはじめ。いま、自分の子どもたちやその同世代の若者たちにとっては、そういう「里山が心地よい」という感覚すら離れている。「なんで森を伐っちゃいけないのですか？」みたいなのが返ってくる感があるので大変難しいと思つているところ。

倉本) 私は大学では農学部に所属しているので、里山についてはかなり知識を持っていて、里山で何かをしたいという学生もいるが現実的な体験が身につけているかということとそうではない。自分が人生の中で一番里山に関わつたのは、都立桜ヶ丘公園のコナラの丘で活動している雑木林ボランティアのコーディネーターをしていた時である。その時はボランティアの人たちがコナラの丘という里山を管理することで、コナラの丘から必要とされるという生きがいがある。何か、やつた結果が本当に良かったのかどうかを自分たちでみて、いいとか、やり過ぎだとか、やり足りないとか、雑木林を伐採したらその後はこういう管理をしないと駄目なんだということに気づいていくという、やってみて考えるという自然とのかかわり方を考え出した。市民がもう一度取り戻す場所として里山は大事だと思ふ。ただ、その時に、見かけを昔と

同じようにすればいいというわけではなくて、もっと丁寧に様々なことをしていった方が、もっと楽しめて生きものと共存できると思う。

質問) 植生が竹の場合、アズマネザサの場合、雑木の場合などで表土の安定はどのように違うのか。田んぼで農薬を使用するようになってからと、使用していなかった頃とでは生物の種数はどのくらい異なるのか。

三島) 田んぼの生物多様性という言葉自体おかしい。田んぼは米の生産工場である。一粒でも多くの米をつくるために管理し、美味しく、安全な米を取る。これが田んぼづくりの目的である。そこに草が生えたら抜く、余計な動物が入ってきたら取り除く、稲がやられちゃうから。当然といえば当然で、田んぼという言葉の中に自然をどれだけ認めるか、米は8割しか穫れないけれども、フナや沢山の水生昆虫がいるような田んぼの運営をしよう、それは田んぼと言えるかどうかはわからない、湿地帯と言った方がいいかも知れない。一昔前、私たちがどんなに努力しても田んぼには色々な虫が入ってきた。こういう時代もあった。沢山の農薬、殺虫剤、効率的な水管理、こんなことで米を沢山収穫する場所が変わった。これをどんなふうに譲り合いながら、一昔前の田んぼの自然を取り戻すか、或は別の言い方で自然の田んぼを少しつくってもいいじゃないか、こういう発想があってもいいかも知れない。或は田んぼという言葉におさらばして、人工的湿地帯という言葉を使うのもいいのではないか。

大場) 里地というのは、昔と今では違う基盤になっている。昔は生活する上での基盤、田んぼもそうだが、そのための維持管理がなされ、結果として、そこに合った生き物が残ってきた。だから環境目標をどこに置くかということが非常に重要な問題で、昔のような管理の仕方、昔のような基盤を求めるのは難しい。特に都市部では難しい。そうすると、全く違った観点、ここでは私が先程申し上げたように、価値観を共有するような教育、或は文化財の保全とか、その中に生物多様性もあるし、ホテルだったら沢山の人たちにそこで感動していただくとか、昔の生活基盤とは切り離れた形での価値観を導入しない限り、昔ながらの価値観で通そうとすると人々のギャップが出てくる。色々な考え方の違い、育ってきた背景、すべてが違うから接点がなくなる。私は最終的には環境目標はホテルに聞く。私の先生はホテルなのだ。ホテルが訴えていると言えば誰も文句を言わない。人が言うといろいろ思惑があるし、考え方が違うので、平行線になる。ということで、これからは発想を少し変えていく必要がある。特に都市部では、このまま放置して、自然更新される場所とそうでない都市部とでは根本的に違う。ただ決定的に一つ言えることは、元に戻らないことはやらない方がいい。

岸) 昔の田んぼ、50~40年前ぐらいまでは生物多様性が高かった。生産効率を上げるために構造が変えられた。現状田んぼに来て、ゲンゴロウの仲間で見られるのはせいぜいハイイロゲンゴロウぐらい。少し前まで見られていたコシマゲンゴロウさえも見られなくなった。それは水質の問題もあるが、乾田化されたこと、近年ではネオニコチノイド農薬、これの影響が大きい。水生昆虫はダメージを受けている。米をつくるためだと、どうしてもその方向に行ってしまう。米のためではない田んぼにしないかぎり、生き物が溢れる田んぼにはならない。田んぼというか、水溜まりだ。それをどう考えるかが大事だと思う。

質問) いずれ日本の人口が減るとどういった影響があるのか。今は都市に集中している。農業政策を変えなければならぬ。田んぼの問題にも響いてくる。人口が減ってくることがどう影響するのかわからないが。

三島) 私はエコロジー、生態学を常に口にしていて、人口密度、生物の棲息密度、例えば、今日の題になっている bio-diversity 生物多様性にも、量的な要素は入っていない。

ある場所に 10 種類の昆虫がいた。それぞれ 10 個体ずつか、100 個体ずつかで、存在する自然の質は大きく変わる。この点は人間でもそんなに大きく変わらない。もっとも人間には技術力があるので、今人口が倍になったら、或は半分になったら、未来はどうなるか。これは大きな問題で、日本という国土、或は、日本という国は、構成する年齢にもよるが、老齢化するか、若者化するか、これは人口がだんだん減ってくるという要素の中には若者の数が増えてくるということも起こりうると思う。日本の未来について、自然との付き合いについて、ただ一つだけ言えることは、自然という大きなシステム、生き物がいたとすると人間が少し減ってくれてなかなかいいなと、こういうふうには陰でひっそりと言うことがあるかも知れない。それにこたえるために、私たちと自然との付き合いに人口の低下に従ってどうするかということも、未来に向かって考えるべきかと思う。

非常に大切な問題で、地域に分散するか、1ヶ所に集まってしまうか、このようなことまでも時々議論している。

日本の人口が半分に減ったら、5大都市か6大都市に集まって、その他の所には人がいない方が自然が保たれていいだろうか。極論だが。

様々な自然との付き合いが未来に向かってできてくるであろう。

人口の問題と、年齢構成の問題と、経済との関わりというのも出てくる。

質問) 里山を残す重要性が今日の話で分かった。私自身、里山を切り崩したようなニュータウンに生まれ育って、重要だとは思いつつ、一般市民として守ることにどうたずさわられるかが分からない。自分では、お米をもっと食べようとか、地野菜をもっと取ろうとか、里山プロジェクトの渡り鳥が来るためのお米を買ってみたりとか、そのくらいのことはしているが、一般市民がこの問題について何をすればいいのか、協力の方法があるのか、教えてほしい。

佐久間) このシンポジウムを主催したかわさき自然調査団だが、水田ビオトープ班の活動で植生管理をしている。生田緑地の裁判の時、外から見ていると、「この人たちは開発した所に住んでいる、その人たちが集まって開発反対の運動をしている」のだと分かって面白いと思った。そこから一步進んで、ここをトトロの森のように戻そうと地道な活動を続けているということが分かったので年に何回かだが、関わってきた。

さっき言ったように、自分で魅力を感じていないと楽しいというのが分からないと思うが、私からみると調査団の里山倶楽部の活動は面白い。こんな面白いことを、この人たちは独占している、なんでこの人たちだけにやらせているの?と思うものがある。里山倶楽部についてはまだ知られていないですね。告知が足りないのかな。そういう楽しさを少しでも感じている人が加わって、「ちょっとあなたもいらっしやいよ」というのを繰り返していくことで新たな関わりができればいいのだろうと思いつつ、なかなか広報の手伝いができないのが悩みである。

岸) 直接里山ということにはならないが、市街地に住んでいる方がいると思うが、街の中で里山に応援できることがある。マンションの場合は難しいが、小さくても庭がある場合は、そこに自然を呼び戻す仕掛けは結構できる。在来の樹を植えたり、在来の草が生えるようにしたり、小さな池をつくるとか。そうす

ることで、中継地点になったり、生き物が棲める場所になったりする。

それから、街中の公園も、今は外来種をいっぱい植えてしまったりとか、下も土が剥げ剥げになったような管理をしている。こういう地域で維持管理しているところがある。川崎でもあるだろう。植物の管理などを、自然に優しい形に変えていけば、その多様性が高くなってくる。そうなれば、生田緑地も、そういう所からの行き来が起こって、全体として川崎の生物多様性が高くなる。そういう取組もすると思う。

大場) 今何をしていると仰っていた。先ずはそれでいいと思う。思いを持つということが大切。ねばならぬというのは疲れる。嫌になる。まず思いを持つこと。

今十分に思いを持っているわけで、それを推進するために、このようなシンポジウムを企画していただいて、皆さんと共有する場をつくっている。で、それぞれの立場で自分に何ができるか、全部一緒では面白くない、多様性がない。個々の立場を尊重しながらできる、身の丈にあったやり方。私は地元でホテルの里づくりをやっている。別にホテルを増やそうとしてやっているわけではなくて、畑や何かつくって、焼き芋大会をやったり、食べるというのは楽しい。そういう楽しみをつくって、こういう所に来ると気持ちいいな、たのしいな、それを少しずつ広げていく、あまり肩肘張らずに、できる範囲のことでやればいいと思う。そのうちに色々な生物との出会いがあって、今まで見向きもしなかったことに対して面白いとか、またそれを子どもに伝えるとか、そういう場が出てくる。コミュニティの再生というか、それにもつながってくる。それでいいと思う。

倉本) 生物多様性を取り戻すための活動は色々なスケール、色々な人の集まりでできると思う。私たちは大学という集りなので、川崎市は川崎市の生物多様性地域戦略をつくってほしいし、大学では生物多様性キャンパス戦略をつくりたい。繰り返し学長会談などの時につくってくれと言っている。明治大学はこの近くにキャンパスがあるが、そこだけではなくて、全然自然が無さそうな所、駿河台、御茶ノ水にもキャンパスがあってそこでもシンポジウムを開催した。大学の斜面に色々なセミが順番に鳴いて、とても大事だという発言をしてくれた人がいて、皆、自分たちの責任を感じて、ここは開発してはいけないと思って帰った。

自分たちが意識して何かを行動して、周りの人と関わりながら、新しい生物多様性の価値を自分たちで見つけて、また行動していく。それがまた近くの、近くには皇居と上野公園の間を結ぶ緑の拠点をつくろうとしている保険会社がある。そこから、明治大学に対して何とかしろと言ってもらうとか、そういう色々なことができていく。今関心を持っているということは、何かを始めるきっかけとしてとても大事なことだと思う。

三島) パネルディスカッションというよりも質問に答えている間に時間になってしまった。パネルディスカッションはちょうど今頃から始めるとちょうどいいのかも知れない。

今日から明日へ、多くの方にお集りいただき、自然或は生田緑地についてもそうだが、未来について、これを機会に、関心をお持ちいただき、今後こういう会を別の形で続けさせていただきたいと思う。

また調査団に関心をお持ちいただいて、人間と自然とのより良い付き合いのために、この 30 周年の明日に向かって大きく皆様のご支援とご協力を賜り、またご協力することをお誓い申し上げます。